長野市の埋蔵文化財第164集

浅川扇状地遺跡群

迎 田 遺 跡（2）

―(仮称)東邦ピュアタウン若槻東条分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2022年３月

長 野 市 教 育 委 員 会

長野市の埋蔵文化財第164集

浅川扇状地遺跡群

迎 田 遺 跡（2）

―(仮称)東邦ピュアタウン若槻東条分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2022年３月

長 野 市 教 育 委 員 会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川･犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしぶりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の埋蔵文化財第164集として刊行いたします本書は、(仮称）東邦ピュアタウン若槻東条分譲地造成工事に伴って実施した、浅川扇状地遺跡群に属する迎田遺跡に関する調査報告書であります。

発掘調査では、奈良時代から平安時代にかけて埋没した谷跡を検出し、出土した弥生時代～平安時代の土器から、周辺に分布する未確認の集落に関する手がかりを得ることができました。

この調査成果が地域の歴史解明の一助として、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いであります。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、この調査にご協力いただいた事業者並びに地域の皆様方に厚く御礼申し上げます。

令和４年３月

長野市教育委員会
教育長　　丸山　陽一

例　言

1　本書は、「（仮称）東邦ピュアタウン若槻東条分譲地造成工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、東邦商事株式会社 代表取締役 増子桂介 と、長野市長 加藤久雄（～令和３年 11 月 10 日）・荻原健司（令和３年 11 月 11 日～）との間で締結された「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」に基づき、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター担当）が実施した。

3　調査地は、長野県長野市大字若槻東条字迎田 550-1 外 に所在する。調査面積は 757㎡である。

4　発掘調査は、令和２年４月６日～令和２年５月 15 日に実施した。また、整理調査および報告書刊行にいたる業務は、調査終了後から令和３年度にかけて行った。

5　本書の編集・執筆は清水竜太が担当した。

6　調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター所管）で保管している。なお、本調査の略記号は「AMTP」である。

凡　例

1　本書では、検出された遺構のうちで時期・性格等が明らかなものを中心に報告した。

2　遺構図の方位は座標北を表している。

3　基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（東経 138°30′00″、北緯 36°00′00″）の座標値（日本測地系 2011）と、日本水準原点の標高を基準とした。

4　遺構実測図は、1/20 で作成した原図をもとに作成した。

5　遺物実測図は、原寸で作成した原図をもとに土器 1/4・土器断面 1/3 で掲載した。

6　遺構写真・遺物写真の縮尺は任意である。

7　土器実測図において、断面黒塗りは須恵器を表す。また、器面の　　は赤色塗彩、　　は黒色処理の範囲を表す。

目　次

第Ⅰ章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査の契機と事務経過 …… 1
　第２節　調査の経過と方法 …… 1
　第３節　調査体制 …… 4
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 5
　第１節　遺跡の立地 …… 5
　第２節　周辺の遺跡 …… 5
　第３節　迎田遺跡一次調査の概要 …… 7
第Ⅲ章　調査成果 …… 8
　第１節　調査の概要 …… 8
　第２節　遺構と遺物 …… 8
第Ⅳ章　まとめ …… 12
写真図版
報告書抄録

【挿図目次】

図１　調査地位置図 …… 2
図２　迎田遺跡調査地点位置図 …… 3
図３　調査範囲図 …… 3
図４　周辺遺跡位置図 …… 6
図５　一次調査地点調査区配置図 …… 7
図６　遺構配置図 …… 8
図７　調査区壁面土層断面図 …… 9
図８　出土遺物実測図 …… 10
図９　迎田遺跡周辺の微地形と調査区 …… 12

【表目次】

表１　土器観察表 …… 11

第Ⅰ章　調査の経緯

第１節　調査の契機と事務経過

調査地は長野市北部の若槻地区に所在する（図１）。若槻地区は、かつては旧北国街道沿いを中心に集落が広がる農山村であったが、1970 年代から 1990 年代にかけて県道長野荒瀬原線や都市計画道路北部幹線などの整備が進み、現在は宅地化・商業地化が著しい地域となっている。

こうした中、住宅街に囲まれた県道沿いの休耕田に総事業面積 2,934.7㎡の宅地造成事業が計画された。平成 30 年５月 15 日、これに係る埋蔵文化財包蔵地の照会が事業主体者から長野市埋蔵文化財センターにあり、照会地が浅川扇状地遺跡群の範囲内にあり、昭和 57 年に迎田遺跡で行われた発掘調査（以下、一次調査）の調査地から約 200m 南東に位置することから（図２）、埋蔵文化財の保護に関する手続きが必要となる旨を伝えた。その後、同年 12 月 19 日付で文化財保護法第 93 条の規定に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」を受理し、平成 31 年１月８日付 30 埋第２－242 号にて「発掘調査」の保護措置を指示した。

試掘調査は同年２月 13 日に実施し、北西から南東に延びる事業地の北西・中央・南東の３箇所に試掘坑を設定した。この結果、北西では地表下 77cm、中央では同 40cm、南東では同 30cm・95cm でそれぞれ遺物包含層を確認し、３月 27 日付 30 埋第５－25 号にて事業主体者に通知した。この後、本開発事業に関わる埋蔵文化財の保護協議を進め、①切土造成される中央～南東９区画分の宅地、開発道路、市道の拡張部分を合わせた約 2,227㎡を対象に記録保存を目的とした発掘調査を実施すること、②各遺物包含層に対応する２面の遺構検出面（以下、一次面・二次面）を設定すること、③上位の遺物包含層まで造成面が達しない中央６区画分の宅地は二次面を現状保存することの諸点で合意した。なお次節で述べるように、調査過程で得られた所見に基づき発掘調査対象区域の見直しを行い、調査面積は最終的に 757㎡まで減少している（図３）。

その後、令和２年４月３日付で長野市教育委員会教育長との間に「埋蔵文化財の保護に関する協定書」、４月６日付で長野市長との間に「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結し、現地における発掘調査を４月６日から５月 15 日まで 40 日間実施した。翌令和３年２月 26 日には変更契約を締結し、その後３月２日付で当該年度分の業務を完了して実績報告書を提出した。発掘調査報告書作成のための整理作業は令和３年度に実施し、令和４年３月に本書を刊行してすべての保護措置を終了した。

第２節　調査の経過と方法

調査の最初の工程となる一次面の表土掘削は、本体工事の一環として、発掘調査委託契約の締結に先立つ４月１日から開始した。試掘調査結果との整合を図るため、二枚の遺物包含層が確認された事業地の南東から掘削を始めたところ、遺構や遺物はおろか炭化物さえ認められず、上位の遺物包含層の認定に誤りがあったことが判明した。そのため、当初計画で一次面までの調査とした中央の宅地は調査対象区域から除外し、翌２日からは開発道路西端からの掘削作業に移った。４月 13 日には発掘作業員の雇用を開始し、残りの表土掘削と併行しながら、既掘範囲の壁面清掃と遺構検出を４月 23 日まで実施した。この結果、調査区の大部分が自然地形である谷跡の範囲内に位置し、居住遺構の検出が見込めないことが予想されるところとなり、その時点で表土掘削に及んでいなかった事業地南東部を調査対象区域から除外することとした。これ以降は谷跡の範囲と埋没時期の特定に主眼をおいて掘削範囲を限定した調査を行い、５月 13 日には現地における作業を終了した。

調査記録のうち遺構測量は、株式会社写真測図研究所に委託した。記録写真は、35mm 判フィルム一眼レフカメラを使用してモノクロネガフィルムおよびカラースライドフィルムで撮影し、APS － C サイズデジタル一眼レフカメラを補助的に併用した。また、ドローンを援用した空中撮影を 5 月 12 日に実施した。

整理作業については、出土土器の洗浄・注記・接合を現地作業終了後の 7 月に実施し、令和 3 年度に遺物実測・図面整理・報告書編集を順次進め、令和 4 年 3 月 31 日の本書の刊行をもってすべての作業を終了した。

図 1　調査地位置図

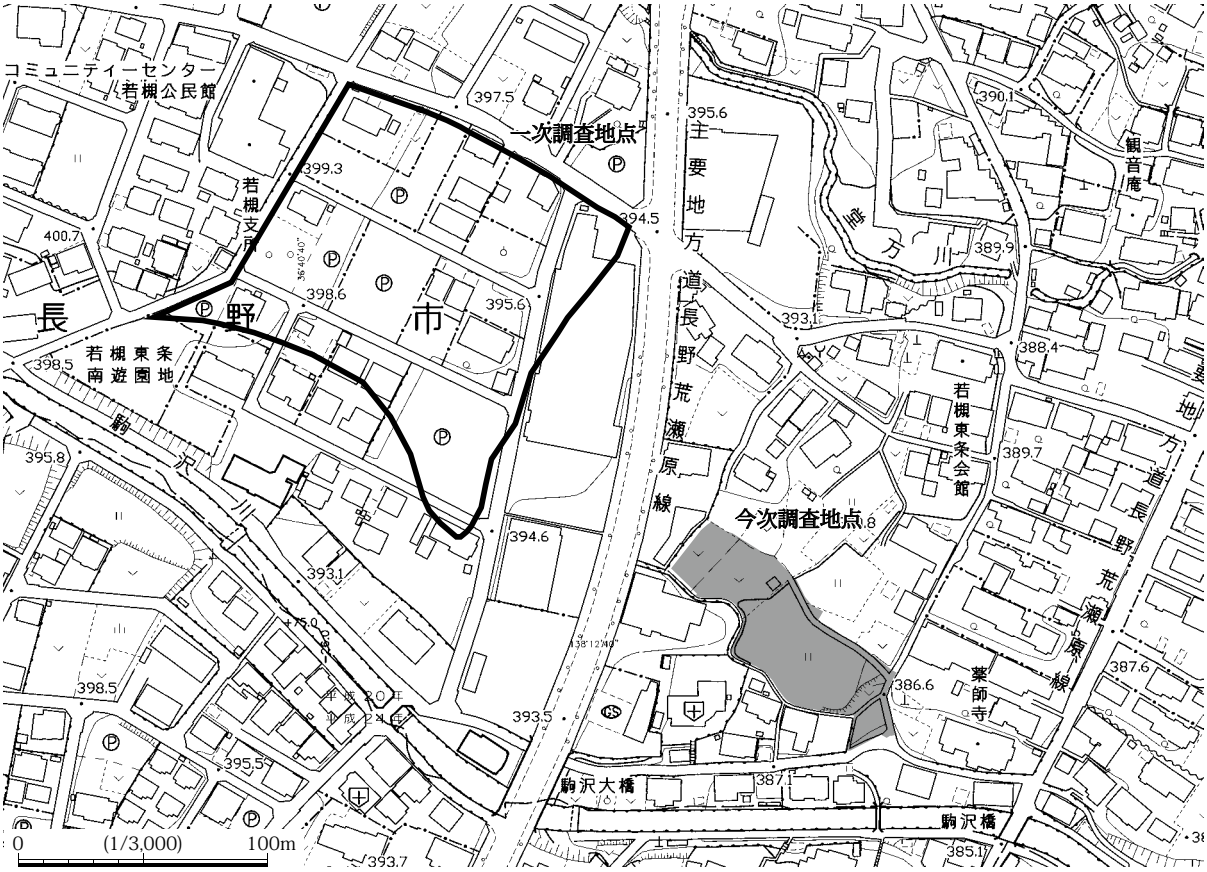


図２　迎田遺跡調査地点位置図

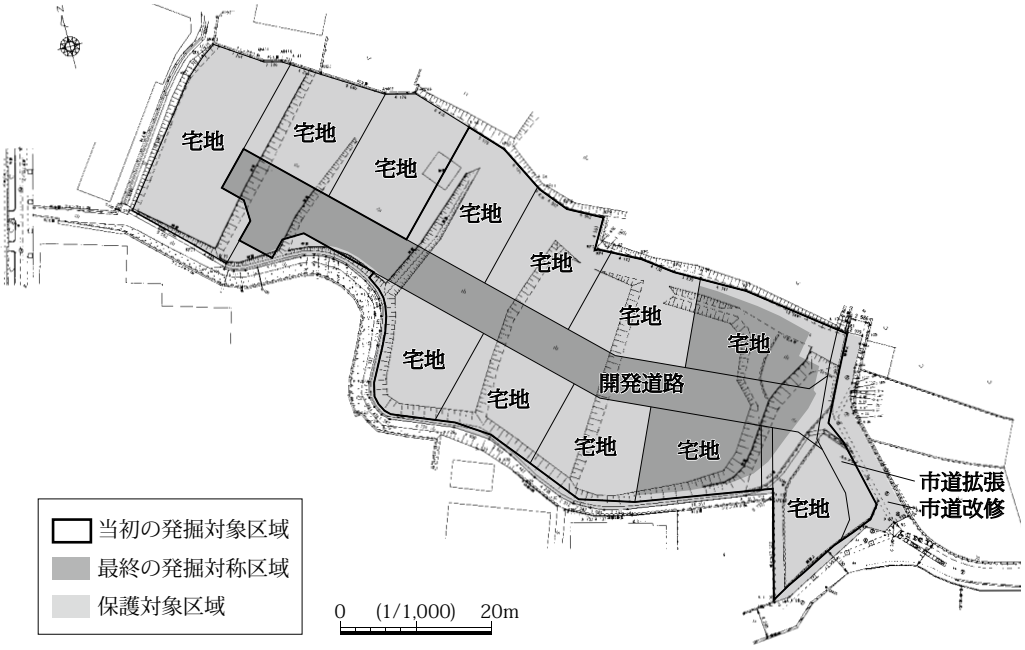


図３　調査範囲図

第３節　調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として長野市埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	近藤　守（令和２年度）
			丸山　陽一（令和３年度）
総括責任者	長野市教育委員会	教育次長	樋口　圭一
総括管理者	長野市教育委員会文化財課	課　長	小柳　仁彦（令和２年度）
			前島　卓（令和３年度）
調査責任者	長野市埋蔵文化財センター	所　長	大井　久幸
調査担当者	長野市教育委員会文化財課（埋蔵文化財センター担当）	課長補佐	飯島　哲也
		課長補佐	風間　栄一（令和３年度）

調査機関　長野市埋蔵文化財センター

庶務担当	係　長	小林　晴和（令和２年度）
	事務職員	宮本　博夫、平林満美子
調査担当	係　長	風間　栄一（令和２年度）
	主　事	小林　和子
	研究員	清水　竜太（主任調査員）
		篠井ちひろ（調査員）
		千野　浩（令和３年度）、田中　暁穂
		遠藤恵実子（令和２年度）、井出　靖夫
		小野　涼香（令和２年度）
		伊藤　愛（令和２年度）

発掘調査員	向山　純子
発掘補助員	後藤　大地
発掘作業員	青山三枝子、岩瀬　佳範、内田　正征、大谷　盛孝、岡沢　貴子 大日方　孝、金子ポンティプ、駒澤　一雄、杉本　千代、田原　次郎 中村　泰明、峯村　茂治、峯山真由美、宮尾　弘子、宮本　正守 向山　久、渡辺　由美
整理調査員	青木　善子、市川ちず子、鳥羽　徳子、半田　純子、武藤　信子
整理作業員	飯島　早苗、清水さゆり、西尾　千枝、待井かおる、宮島　恵子 三好　明子
遺構測量委託	株式会社写真測図研究所
重機等現物提供	東邦商事株式会社（本体工事請負業者：株式会社北條組）

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の立地

迎田遺跡が所在する長野市は、飯縄山・戸隠山・黒姫山などの北信五岳を背負う長野県北部に位置し、千曲川の下流に広がる長野盆地の大半と、西側の西部山地、東側の東部山地に市域を有する。市内には 1,116 箇所の遺跡があり（令和４年３月現在)、本遺跡を含む大多数の遺跡は長野盆地に立地する。

古くから善光寺平と呼ばれる長野盆地は、千曲川と犀川の合流地点を中心にひらけた中央高地内陸部を代表する盆地である。長さ約 35km、幅約 10km の南西―北東方向に延びる紡錘形を呈し、南端の千曲市稲荷山付近で標高 360m、北端の中野市延徳で同 330m と、きわめて平坦な地形をなしている。盆地床を構成するのは、中央を北流する千曲川の氾濫原と、東西の山地から流下する河川の扇状地であり、大半を後者が占める。本遺跡は、飯縄山に源を発する浅川が形成した扇状地上の遺跡を総称する「浅川扇状地遺跡群」を冠しているものの、地形上は浅川の北を流れる駒沢川の小規模扇状地に立地している。調査地周辺は、南を駒沢川、北を堂万川が扇状地面を開析して流下し、北西から南東に長い台地状の地形を呈している。調査前の現況は７段の水田面からなる休耕地で、標高は 386 ～ 390m である。

第２節　周辺の遺跡

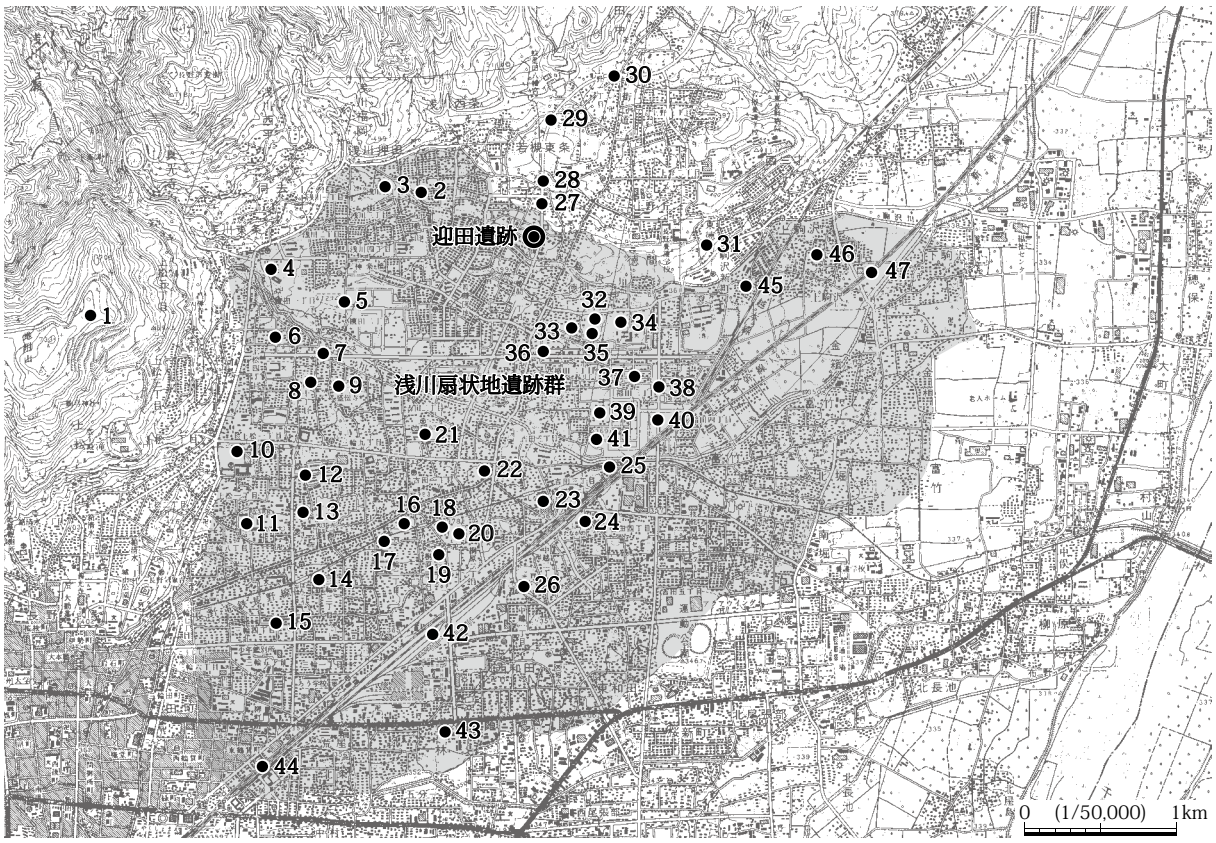
市内有数の遺跡密集地である浅川扇状地は、その全域が「浅川扇状地遺跡群」に登録され、これまで多くの発掘調査が行われている（図４)。本節では、浅川扇状地遺跡群およびその隣接地に所在する遺跡のうち代表的なものを時期ごとに概観していく。各遺跡の詳細な内容については、付表に示した報告書を参照されたい。

縄文時代の遺跡は、扇状地扇頂部から扇央部にあたる浅川地区・若槻地区・吉田地区の浅川沿いに点在している。松ノ木田遺跡（4）は、前期後葉・中期後葉・後期にわたるこの時代を代表する遺跡で、前期後葉には玦状耳飾を転用した石製装身具類を生産していたと考えられている。

扇状地の本格的な開発は弥生時代に始まり、三輪地区や徳間・稲田地区など、扇状地両翼にも遺跡の分布域が拡大する。檀田遺跡（5）では、中期後半・後期後半の大規模な集落が検出された。中期後半の集落は、大半の住居跡が栗林式土器編年における最古段階に位置付けられ、同時期の浅川端遺跡（7)・牟礼バイパス D 地点遺跡（30）に対する拠点的な集落であったと考えられる。また、礫床木棺墓を含む９基からなる木棺墓群が居住域に隣接して検出され、当時の集落構造の一端が明らかになった。後期後半においては在地土器とともに多くの北陸系土器が出土した。同様の事象は本村東沖遺跡（10)・長野女子高校校庭遺跡（13）などでもみられ、北陸系土器の流入が本格化する弥生時代末に先んじる共伴事例として評価される。後期初頭吉田式土器の標式遺跡である吉田高校グランド遺跡（21）では、東北地方の天王山式土器の影響を受けた土器やアメリカ式石鏃が出土した。該期における東北地方との交流を示す数少ない遺物として注目される。なお扇頂部の本遺跡では中期初頭、扇端部の国鉄車両基地遺跡（42、笹澤 1970）では中期前半と、長野市内では出土例の少ない時期の土器が見つかっている。

古墳時代になると、それまで遺跡の分布が希薄であった扇央部の桐原地区や扇端部の平林地区でも遺跡が認められるようになる。弥生時代末～前期の集落遺跡はいずれも検出住居数が少ないが、檀田遺跡・返目遺跡（17)・桐原宮北遺跡（18)・桐原牧野遺跡（19)・吉田古屋敷遺跡（23)・吉田四ツ屋遺跡（24）で方形周溝墓が見つかっている。中期の本村東沖遺跡は該期の拠点集落とみられ、石製模造品の製作工房を含む 56 軒の住居跡が検出さ

れたほか、多量の古式須恵器や子持勾玉・土鈴などの特殊な遺物が出土した。集落の存続期間から、地附山古墳群(1)の築造に直接関わった人々の居住域と考えられている。扇端部に位置する同じく中期の駒沢新町遺跡(45)は、５箇所の祭祀遺構が確認され、駒沢祭祀遺跡として一部が県史跡に指定されている。後期は、90 軒の住居跡を検出した檀田遺跡を除けば、小規模な遺跡が点在している。湯谷東古墳群（6）は６世紀末頃に構築された７基の円墳からなる古墳群で、現在は２号墳のみが残されている。



No.	遺跡名称	種別	縄文	弥生	古墳	古代	中世	報告書番号
	迎田遺跡	集落跡		△	△	○		13
1	**地附山古墳群（7基）**	古墳			○			30
2	浅川西条遺跡	集落跡				○		2
3	小板屋遺跡	集落跡				○		94
4	松ノ木田遺跡	集落跡	○					77・82
5	檀田遺跡	集落跡	○	○	○	○	○	41・105
6	**湯谷東古墳群（7基）**	古墳			○			10
7	浅川端遺跡	集落跡	○	○	○	○		29・102・122
8	古宇木遺跡	散布地		○	○			161
9	押鐘遺跡	集落跡				○		41・136
10	本村東沖遺跡	集落跡	△	○	○	○		50・67・111
11	本村南沖遺跡	集落跡	△	○	○	○		県 113
12	下宇木遺跡	集落跡		○	○			38
13	長野女子高校校庭遺跡	集落跡		○	○	△		134
14	三輪遺跡	集落跡		○	○	○	○	6・20・38・49・62・75・140・154
15	本郷前遺跡	集落跡		○	○		○	103・150
16	桐原宮西遺跡	集落跡			○	○		108
17	返目遺跡	集落跡	△		○			108
18	桐原宮北遺跡	集落跡	△	○	○	○	○	130
19	桐原牧野遺跡	集落跡			○	○	○	143・145・159
20	桐原要害（高野氏館跡）	城館跡					○	145
21	吉田高校グランド遺跡	集落跡		○				22・97
22	吉田町東遺跡	集落跡	△	○	○	○		71・112・126・152
23	吉田古屋敷遺跡	集落跡	○	○	○	○		84・108・118・119・120
24	吉田四ツ屋遺跡	集落跡	○	○	○	○		75・160

No.	遺跡名称	種別	縄文	弥生	古墳	古代	中世	報告書番号
25	辰巳池遺跡	散布地	△	○	○	○		103
26	中越遺跡	集落跡		○		○	△	146・148
27	**牟礼バイパスA地点遺跡**	集落跡	○		○			12
28	**牟礼バイパスB地点遺跡**	集落跡			○	○		17・65
29	**牟礼バイパスC地点遺跡**	集落跡				○		17
30	**牟礼バイパスD地点遺跡**	集落跡		○	○	○		17
31	徳間本堂原遺跡	集落跡	△	○	○		○	69・139
32	徳間番場遺跡	散布地		○		○	○	144・148
33	徳間榎田遺跡	集落跡			○			99
34	徳間柳田遺跡	集落跡		○	○	○		9・47
35	徳間中南遺跡	散布地		○		○		144
36	稲添遺跡	集落跡			○	○	○	47
37	本堀遺跡	集落跡		○	○		○	47
38	二ツ宮遺跡	集落跡		○	○	○	○	47・71・122
39	天神木遺跡	集落跡		△			○	104
40	権現堂遺跡	集落跡			○	○	○	104・108
41	樋爪遺跡	集落跡		○	○	○		104
42	国鉄車両基地遺跡	散布地		△	△			
43	平林東沖遺跡	集落跡		△	○	○		116・138
44	東居町遺跡	散布地						県 34
45	駒沢新町遺跡	集落跡				○		10・55・126
46	上長畑遺跡	集落跡					○	111
47	駒沢城跡	城館跡					○	76・127

・ゴシック体で表記した遺跡は浅川扇状地遺跡群に含まない。
・○は遺構・遺物の確認、△は遺物のみの確認を示す。
・報告書番号のうち、「県」を冠したものは長野県埋蔵文化財センター発行の報告書を示す。

図４　周辺遺跡位置図

古代は扇状地全域で遺跡が確認され、特に扇状地北部の若槻地区、稲田・徳間地区、扇央部の桐原地区では比較的大きな規模の集落が形成される。特殊な遺物に、本堀遺跡（37）・牟礼バイパスＣ地点遺跡（29）・同Ｄ地点遺跡の７世紀代に遡る軒瓦や稲添遺跡（36）の平安時代の瓦塔など仏教関連遺物、桐原宮北遺跡の稜椀・双耳杯・円面硯など官衙関連遺物がある。

中世は、各集落遺跡で見つかった遺構・遺物のほか、15 箇所の城館跡が知られる。そのうち発掘調査が実施されたのは駒沢城跡（47）と桐原要害（高野氏館跡）（20）の２箇所で、それぞれ堀と考えられる溝状遺構や柵列・掘立柱建物などが検出されている。

第３節　迎田遺跡一次調査の概要

迎田遺跡は、若槻東条団体営非補助土地改良事業に伴う分布調査で発見され、昭和 57 年（1982）に発掘調査が行われた（長野市教育委員会 1983）。調査対象地が 12,000㎡と広大なため、10m 間隔に設定したトレンチを適宜拡張するというのが当初の調査方針であった。しかし、最初に掘削したトレンチにおける遺物包含層の確認高が施工深度よりも深く、発掘による耕作への影響を抑えたい開発側の意向もあって、以降の調査は任意に設定した７箇所の試掘坑で行われた。また、施工深度が遺物包含層まで達する４号道・５号道については工事立会いとし、必要に応じて発掘調査を実施した（図５）。

見つかった遺構は、４号道の平安時代前期竪穴住居跡１軒だけである。また、トレンチ西端で弥生時代後期、試掘坑および工事立会いで弥生時代中期・古墳時代中期の土器を検出した。

限られた調査範囲のため遺跡の内容には不明な点が多いが、弥生時代中期～後期、古墳時代中期、平安時代の各遺構面が存在し、土器の出土量の多い古墳時代中期に主体があるものと予想されている。また遺跡範囲については、調査地西側のコミュニティーセンター付近を中心とした、駒沢川と堂万川に挟まれた一帯が想定されている。

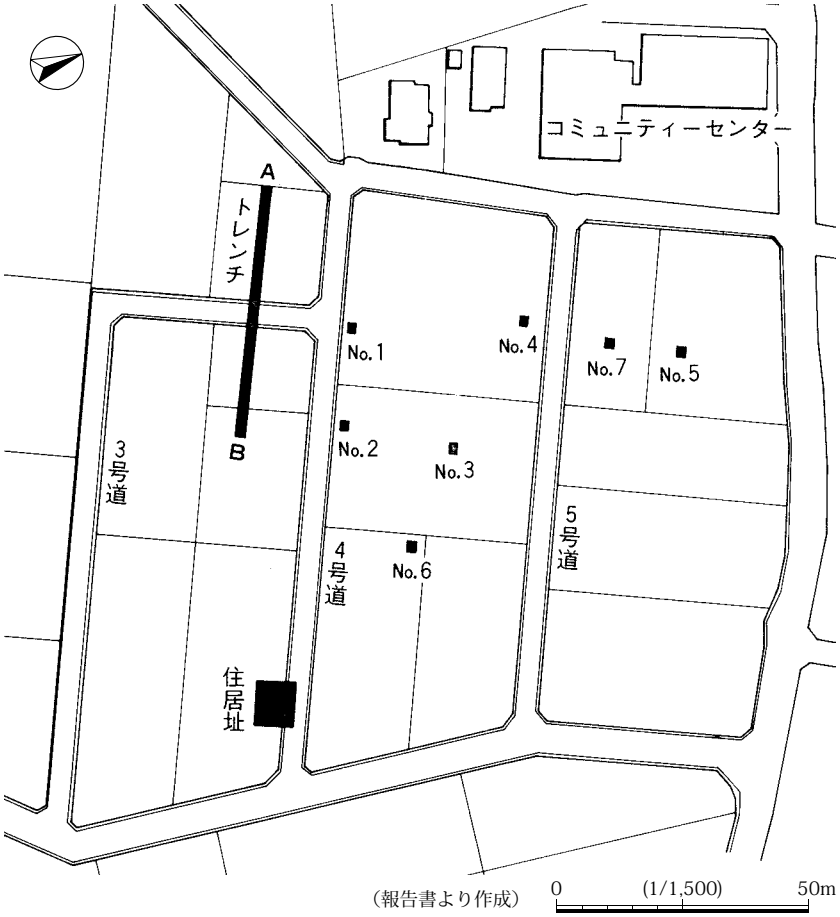


図５　一次調査地点調査区配置図

参考文献

笹澤浩 1970「善光寺平における弥生時代中期後半の土器」『信濃』第Ⅲ期第 23 巻第 12 号、信濃史学会

長野市誌編さん委員会 1997『長野市誌 第１巻 自然編』、長野市

長野市教育委員会 1983『浅川扇状地遺跡群 迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』長野市の埋蔵文化財第 13 集

第Ⅲ章　調査成果

第１節　調査の概要

検出した遺構は、奈良～平安時代に埋没した谷跡と時期不明の小穴である（図 6）。調査区の大部分を谷跡が占め、地山の検出範囲はわずかである。調査区 C―C′ 壁面（図 7）に代表させて本調査地の基本層序を示すと、上位から表土層・造成土層（1・3 層）、水田層（4・5 層）、自然堆積層（6・7 層）、谷跡覆土層（8 ～ 11 層）、地山層（12・13 層）となる。谷跡は自然堆積層の下面で確認できるが、調査開始当初は谷跡の覆土最上層である 8 層を遺物包含層、9 層上面を地山と認識して表土掘削を進めたため、遺構検出面は確認面よりも 50cm ほど低く設定された。なお、4・5 層より出土した陶磁器から水田層の形成は江戸時代以降と考えられ、それ以前には自然堆積層を表土とする低地が周辺に広がっていたものと推測される。

出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器がある。遺構検出状況を踏まえれば、陶磁器を除くほとんどの土器は谷跡に帰属するものと考えてよいだろう。内寸 53.4㎝ × 33.4cm × 6cm の収納箱で 3 箱と出土量は少ないが、後述するように谷跡の掘削範囲は非常に狭く、取り上げた土器は埋蔵量全体のごく一部に過ぎない。

第２節　遺構と遺物

谷跡　　調査区のほぼ全域で検出された自然地形である。北西から南東に延びる溝状の落ち込みで、検出長は約 80m を測り、両端は調査区外に続く。狭長な調査区のほとんどが落ち込みの範囲内に位置していることに加え、一部に大規模な撹乱を受けていることか

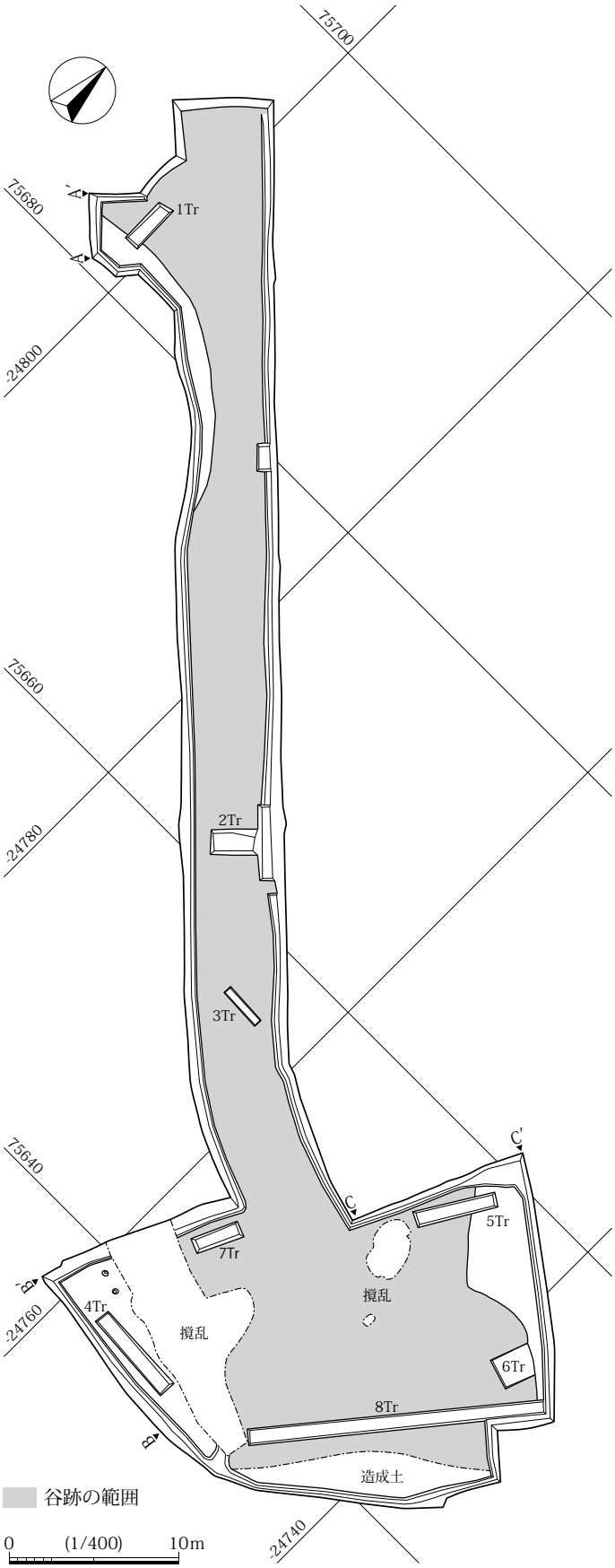
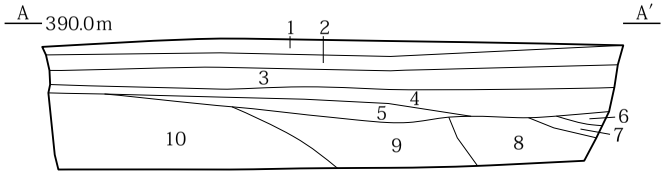
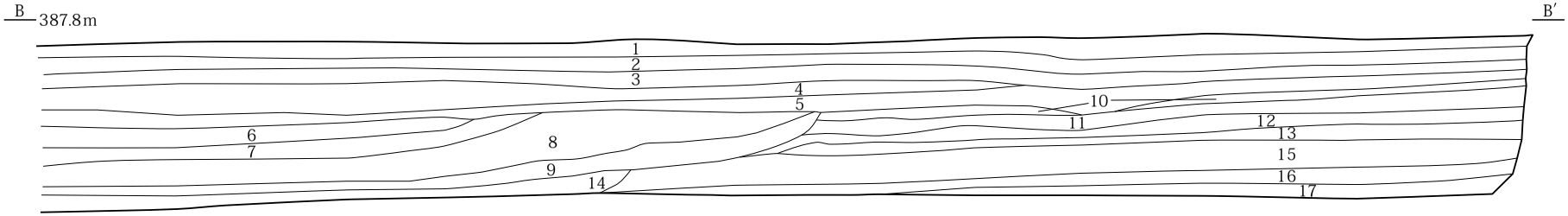


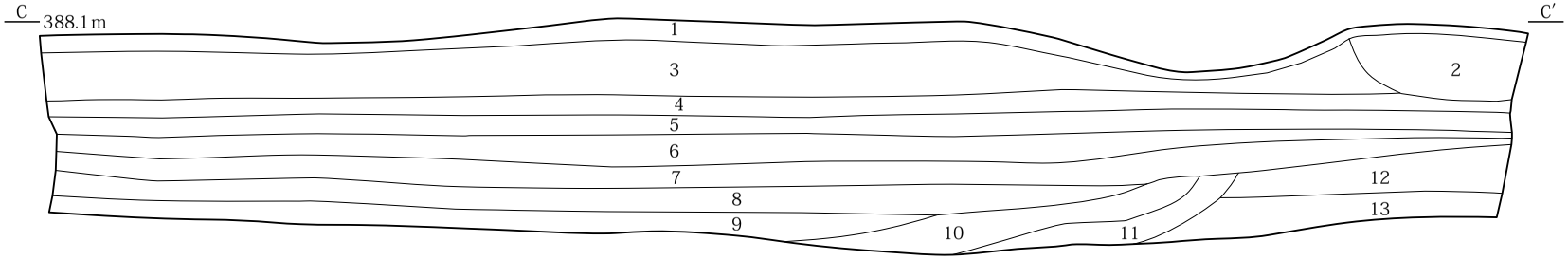
図６　遺構配置図



1、表土
2、褐灰色粘土（10YR4/1、水田層）
3、オリーブ褐色粘土（2.5Y4/3、水田層）
4、オリーブ褐色粘質土（5Y3/1）
5、オリーブ褐色粘質土（5Y3/1、φ～10cm の礫を多く含む）
6、オリーブ褐色粘質土（7.5Y3/1、土器を含む、谷跡覆土）
7、オリーブ黒色粘質土（7.5Y3/1、礫・土器を含む、谷跡覆土）
8、黒褐色砂（10YR3/2、礫を含む、地山）
9、暗褐色砂質土（10YR3/3、地山）
10、黒褐色砂（10YR3/2、礫を多く含む、地山）



1、表土
2、褐灰色粘土（10YR4/1、水田層）
3、オリーブ褐色粘土（2.5Y4/3、水田層）
4、オリーブ褐色粘質土（5Y3/1）
5、オリーブ褐色粘質土（5Y3/1、φ～10cm の礫を多く含む）
6、黒褐色粘質土（7.5YR3/1、谷跡覆土）
7、オリーブ黒色粘質土（5Y3/1、谷跡覆土）
8、黒色粘質土（10YR1.7/1、谷跡覆土）
9、黒褐色粘質土（2.5Y3/2、谷跡覆土）
10、暗灰黄色細砂（2.5Y6/2、地山）
11、黒褐色砂（2.5Y3/2、地山）
12、10 に同じ
13、11 に同じ
14、暗灰黄色砂（2.5Y4/2、礫を多く含む、地山）
15、10 に同じ
16、オリーブ黒色細砂（5Y3/1、地山）
17、10 に同じ



1、表土
2、明黄褐色土（10YR6/6、造成土）
3、黒褐色土粘質土（7.5YR4/1、造成土）
4、褐灰色粘土（10YR4/1、水田層）
5、オリーブ褐色粘土（2.5Y4/3、水田層）
6、オリーブ褐色粘質土（5Y3/1）
7、オリーブ褐色粘質土（5Y3/1、φ～10cm の礫を多く含む）
8、黒褐色粘質土（7.5YR3/1、谷跡覆土）
9、オリーブ黒色粘質土（5Y3/1、谷跡覆土）
10、黒色粘質土（5Y2/1、土器を含む、谷跡覆土）
11、黒灰色粘質土（2.5Y4/1、土器を含む、谷跡覆土）
12、暗褐色砂（10YR3/3、礫を多く含む、地山）
13、黄褐色砂質土（2.5Y5/4、地山）

0　(1/50)　2m

図７　調査区壁面土層断面図

ら、面的に確認できたのは南西肩の約 18m（調査区西部）と、北東肩の約 13m（調査区東部）だけであった。両肩を通して検出できた場所はないが、調査区 B—B′ 壁面で覆土が確認できるので、調査区東部では 30m 程度の谷幅があるものと推定される。自然地形であることからトレンチによる部分的な掘削にとどめ、3 箇所の調査区壁面および 1・5・6・7・8 トレンチにおいて、比較的緩やかな落ち込を確認した。また谷の中央寄りに設けた 2 トレンチでは、基本層序 9 層（以下、層番号のみ記載）の上面から約 120cm 下で底面を検出した。検出高から底面までの比高と、想定される谷幅を考え合わせれば、浅い皿形〜椀形を呈する断面形が予想される。

覆土の堆積は、調査区壁面で最大 4 層を把握した。また、土層断面図は作成していないが、2 トレンチの 9 層から下位では、グライ化した砂層と粘土層の互層を確認した。9 層から下位は現在でも湧水が著しく、谷跡の内部は本来低湿地であったと推測される。グライ化層中には、奈良時代〜平安時代前期を主体とする土器や自然木が高低による粗密なく一定量含まれており、この時期に断続的な土砂の流入があったことが窺われる。

図 8 には、遺構検出や壁面精査の作業で取り上げたものも含め、谷跡に帰属すると判断される遺物を示した。

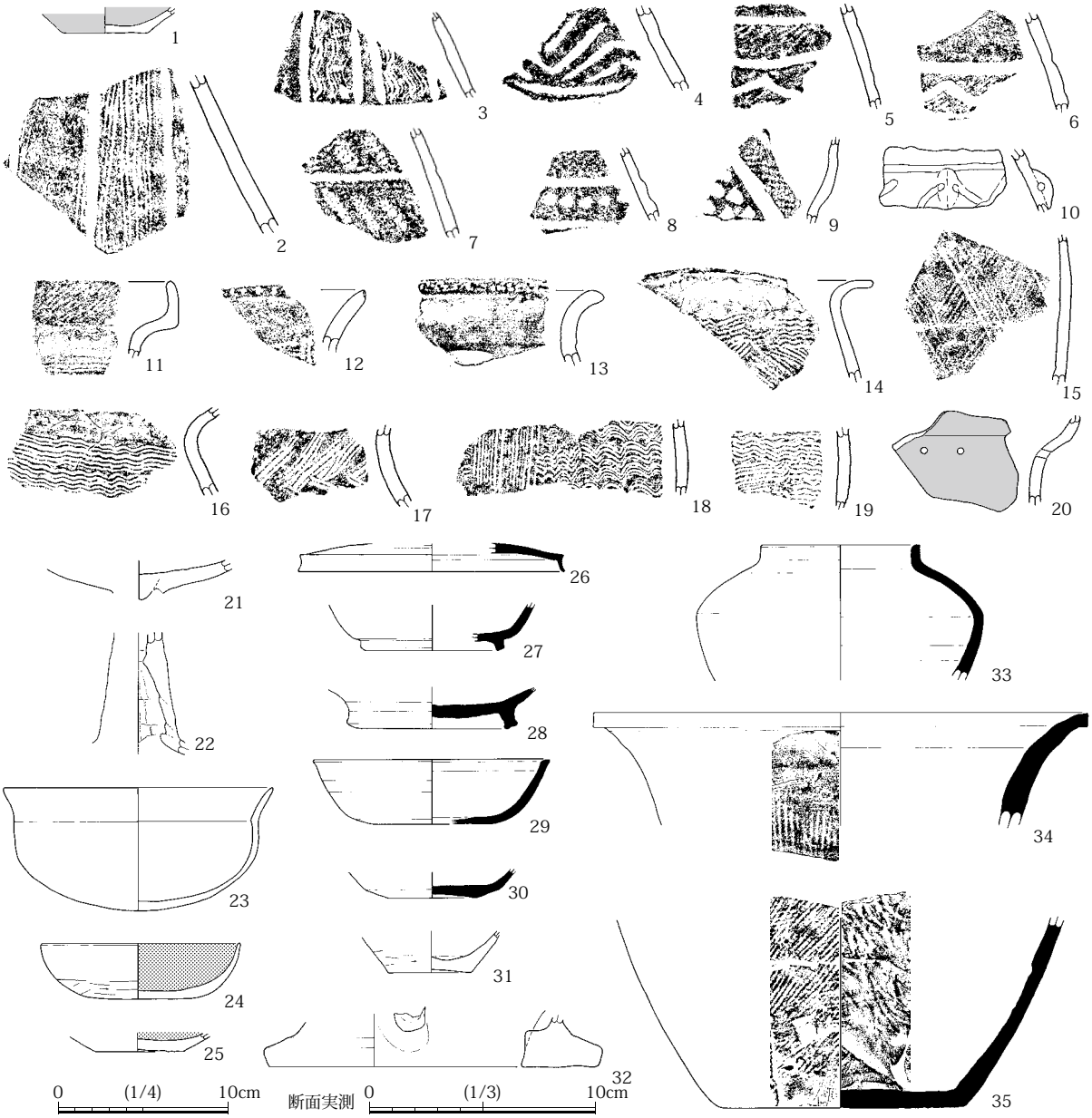


図 8　出土遺物実測図

1～20 は弥生土器である。いずれも中期後半の栗林式のもので、器面および破断面の摩耗が激しく、接合関係をもつものはほとんど認められない。21～23 は土師器で、古墳時代中期前半に位置付けられる。該期の土器は他時期の土器に比べて相対的に出土量が少なかったが、鉢（23）の遺存度は比較的高い。谷跡の埋没時期を遡る以上二時期の土器は、調査区北東隅周辺で密に検出された。24・25・31・32 は土師器、26～30、33～35 は須恵器で、奈良時代～平安時代前期に位置付けられる。該期の土器は出土土器の主体をなし、谷跡の埋没時期を示すものと考えられる。

谷跡から出土した土器は基本的に周囲からの流れ込みと判断され、谷跡を挟む微高地上に未確認の居住域が存在することを示唆するものである。

小穴　調査区東側で近接する 2 基を確認した。地山を掘り込んでいるものの、位置的には谷跡の範囲内にあるのは確実である。出土遺物がなく、時期は不明である。

表 1　土器観察表

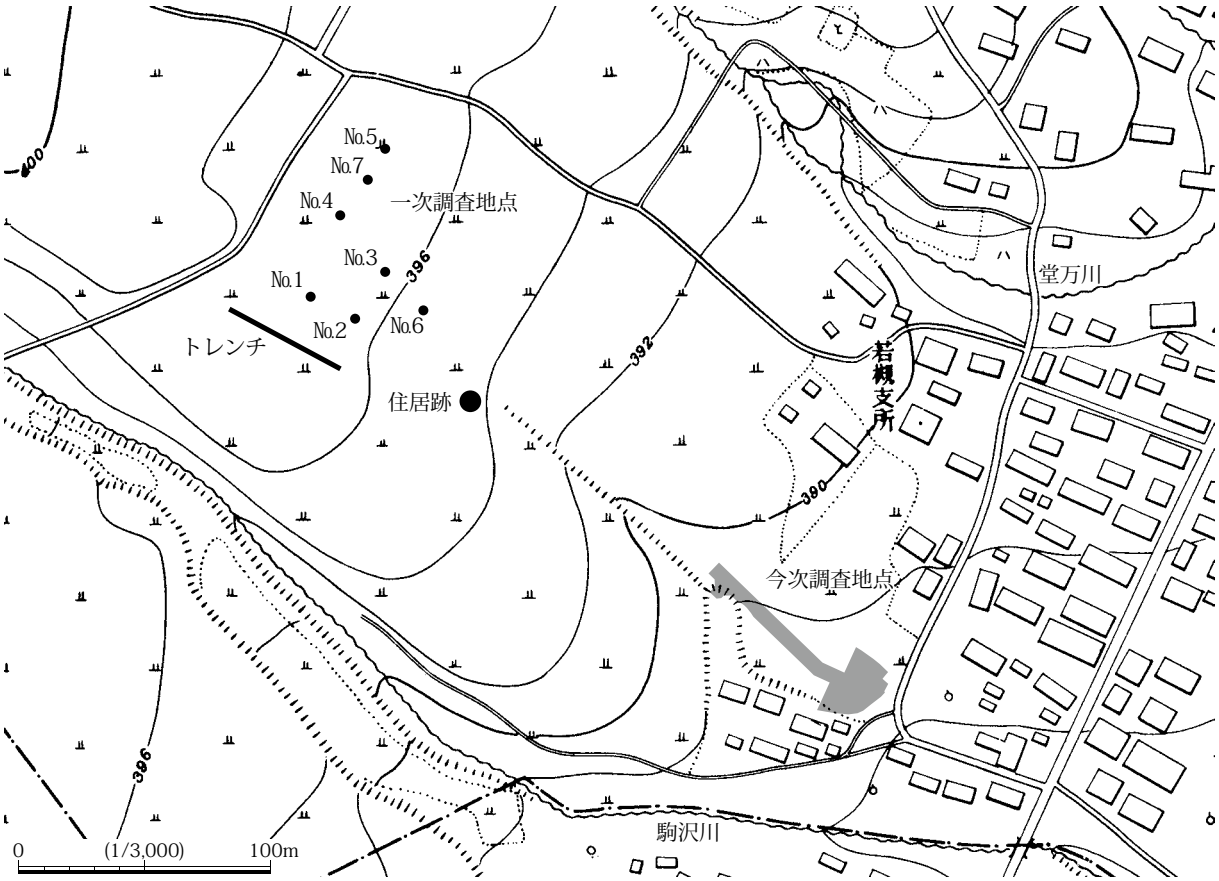
・「遺存」は、図化範囲における残存率を分数で表記した。
・「色調」は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修『新版 標準土色帖』の色名を表記した。ただし「にぶい」は「に」と略した。

図番号	掲載番号	遺構	層位	種別	器種	遺存	色調	成形・調整	文様・備考	取上	実測番号
8	1	谷跡	覆土	弥生	鉢	4/5	灰白	外：赤彩ミガキ、内：赤彩ミガキ		8Tr	1
8	2	谷跡	覆土	弥生	壺	－	に黄褐	外：ハケ→ミガキ	胴：懸垂文（櫛垂下文→沈線文）	東壁	1
8	3	谷跡	覆土	弥生	壺	－	に黄橙		胴：懸垂文（沈線文・櫛波状文）	8Tr	5
8	4	谷跡	覆土	弥生	壺	－	に黄橙		胴：横走沈線文・重山形文	8Tr	19
8	5	谷跡	覆土	弥生	壺	－	に黄橙		胴：横走沈線文、縄文、山形文	8Tr	18
8	6	谷跡	覆土	弥生	壺	－	浅黄橙	外：ハケ→ミガキ	胴；横走沈線文・縄文・山形文	6Tr	1
8	7	谷跡	覆土	弥生	壺	－	に橙		胴：横走沈線文・櫛刺突文	8Tr	10
8	8	谷跡	覆土	弥生	壺	－	に橙		胴：横走沈線文・縄文・押引列点文	8Tr	11
8	9	谷跡	覆土	弥生	壺	－	に黄橙		胴：沈線文・押引刺突文・縄文	8Tr	7
8	10	谷跡	覆土	弥生	壺	－	明褐灰	赤彩ミガキ	胴：横走沈線文・沈線文・穿孔付突起	8Tr	8
8	11	谷跡	覆土	弥生	甕	－	灰黄褐		口縁：縄文、頸：櫛直線文	検出	3
8	12	谷跡	覆土	弥生	甕	－	に橙		口唇：刻目、胴：櫛垂下文→櫛直線文	8Tr	3
8	13	谷跡	覆土	弥生	甕	－	に黄橙	口縁：横ナデ	口唇：縄文	8Tr	6
8	14	谷跡	覆土	弥生	甕	－	に黄橙	口縁；横ナデ	頸：櫛波状文、胴：縦羽状文、	8Tr	4
8	15	谷跡	覆土	弥生	甕	－	に橙		胴：斜格子文	8Tr	9
8	16	谷跡	覆土	弥生	甕	－	灰白	口縁：横ナデ	胴：櫛波状文	東壁	2
8	17	谷跡	覆土	弥生	甕	－	に黄橙		胴：横羽状文	8Tr	20
8	18	谷跡	覆土	弥生	甕	－	に橙	内：横ハケ	胴：櫛垂下文→櫛波状文	8Tr	17
8	19	谷跡	覆土	弥生	甕	－	黄橙		胴：櫛波状文、黒斑	8Tr	19
8	20	谷跡	覆土	弥生	壺	－	に黄橙	外：赤彩ミガキ	2 孔 1 組緊縛孔	8Tr	2
8	21	谷跡	覆土	土師	高杯	1/1	橙	外：ミガキ		検出	4
8	22	谷跡	覆土	土師	高杯	1/2	に橙	脚柱外：縦ミガキ、脚柱内：粘土紐接合痕・絞り目・ケズリ		8Tr	12
8	23	谷跡	覆土	土師	鉢	1/4	橙	外：縦～斜ミガキ、内：縦～斜ミガキ		8Tr	16
8	24	谷跡	覆土	土師	杯	1/3	黒	口：横ナデ、外：ケズリ、内：横ミガキ	内：黒色処理	2Tr	6
8	25	谷跡	覆土	土師	杯	1/1	浅黄橙	ロクロ成形、内：ミガキ、底：回転糸切り	内：黒色処理	5Tr	1
8	26	谷跡	覆土	須恵	杯蓋	1/5	灰	ロクロ成形、外：回転ケズリ		2Tr	5
8	27	谷跡	覆土	須恵	有台杯	1/6	橙	ロクロ成形		釜場	1
8	28	谷跡	覆土	須恵	有台杯	1/1	に橙	ロクロ成形、底：回転ヘラ切り		2Tr	2
8	29	谷跡	覆土	須恵	無台杯	1/4	黄灰	ロクロ成形、底：回転ヘラ切り	内外：火襷	2Tr	4
8	30	谷跡	覆土	須恵	無台杯	1/1	灰褐	ロクロ成形、底：回転糸切り		8Tr	14
8	31	谷跡	覆土	土師	甕	1/1	に橙	ロクロ成形、外：ケズリ、底：回転糸切り		2Tr	3
8	32	谷跡	覆土	土師	甑	1/5	浅黄橙	外：横ナデ	桟受用窪み穴 1 箇所残	検出	1
8	33	谷跡	覆土	須恵	短頸壺	1/6	暗灰	ロクロ成形		2Tr	1
8	34	谷跡	覆土	須恵	甕	1/5	灰	外：平行タタキ		検出	5
8	35	谷跡	覆土	須恵	壺	1/4	灰赤	外：平行タタキ、内：同心円当て具痕→半スリケシ、底：ナデ		黒色土	1

第Ⅳ章　まとめ

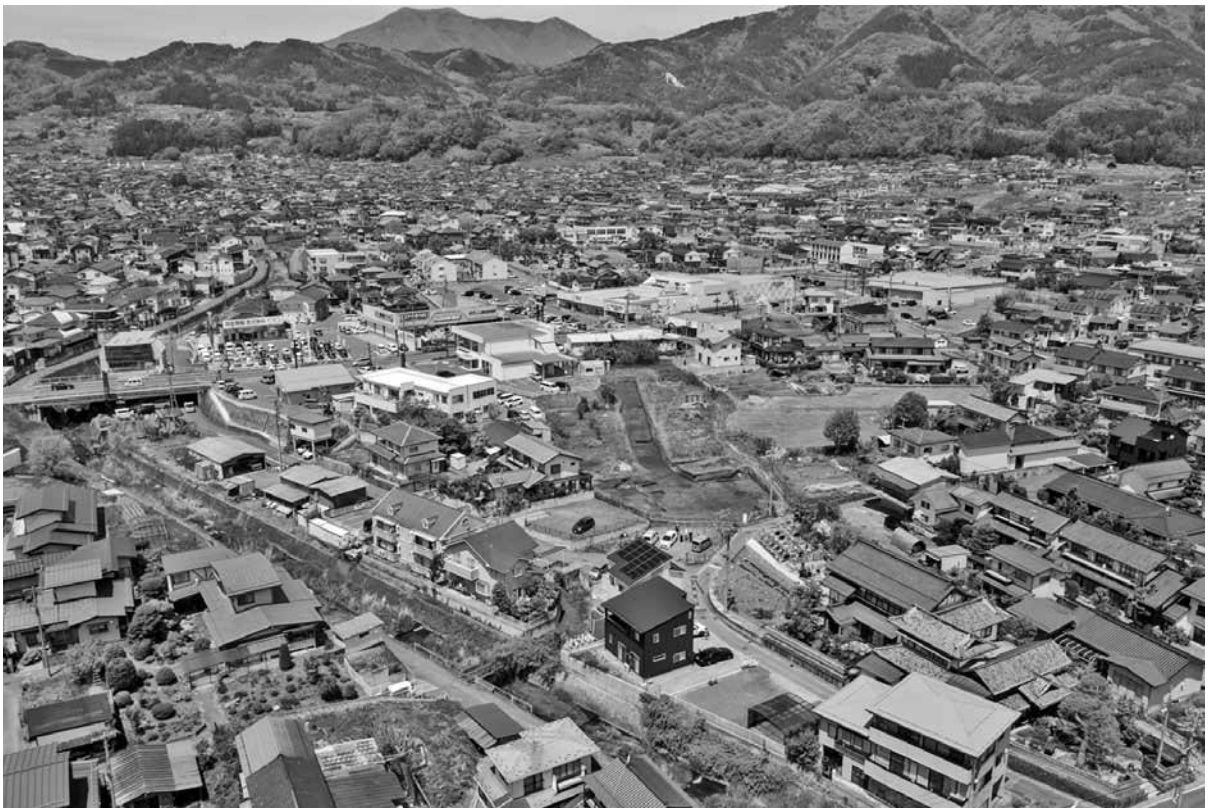
今回の調査では、調査区の大部分を自然地形の谷跡が占め、竪穴住居跡などの居住遺構は確認されなかった。低湿地であったと推測される奈良時代以前はもちろん、低地となった平安時代以降も、居住域としては適地でなかったのだろう。谷跡の覆土中からは、奈良時代～平安時代を主体に、弥生時代中期・古墳時代中期の土器が出土した。周囲からの流れ込みとみられるこれらの土器は、その供給源となった居住域が近在していることを示唆するものと考えられる。周辺の大規模開発が始まる以前の起伏を留める昭和 31 年測量の地形図へ迎田遺跡の調査区を重ねたものを図 9 に示した。これをみると、今回の調査で確認した谷跡が等高線として明瞭に表れており、同時に谷跡の南北に延びる尾根状の微高地も確認できる。どの時期の遺構がどこにどの程度分布しているかは判断し難いが、この微高地上に各時期の居住域が展開している蓋然性はきわめて高いと考えられる。

ただ、ここで想定した居住域と一次調査地点周辺の居住域を一連のものと見なすのは難しそうである。と言うのも、一次調査にあった弥生時代中期初頭・同後期の土器が今次調査では見出せず、一次調査で主体をなす古墳時代中期の土器が今次調査で客体的な存在だった一方で、一次調査で判然としない奈良時代の土器が今次調査で多く確認されるなど、両調査地点における土器の出土傾向には大きな違いが認められる。また、両調査地点の間を通る県道の敷設に際して発掘調査が実施されておらず、この区間が無遺構空間であることも十分に予想されるところである。駒沢川と堂万川に挟まれた台地状地形一帯を遺跡範囲とすることに変更を加えるものではないが、微地形で分別された存続期間の異なる居住域が併存している可能性が想定できる。



昭和三十一年九月測図 長野市三千分一地形図「徳間」を改変

図９　迎田遺跡周辺の微地形と調査区



調査地遠景（空中写真、南東より）

調査区全景（空中写真、上が北東）

写真図版２

谷跡南西肩（西より）

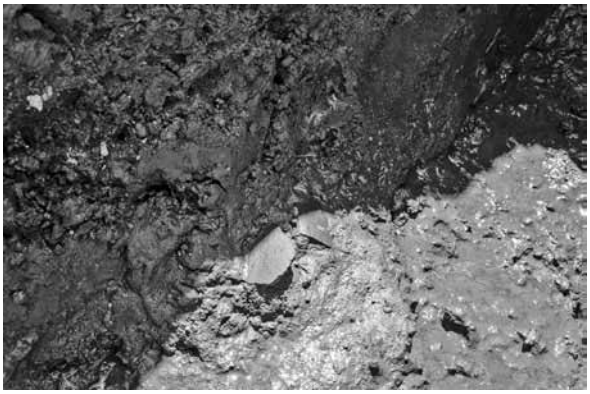
谷跡北東肩（北より）

調査区壁面 A—A'（北東より）

調査区壁面 B—B'（北より）

調査区壁面 C—C'（南東より）

２トレンチ（南東より）



２トレンチ遺物出土状況（南東より）

写真図版４

５トレンチ（南東より）

８トレンチ（南西より）

遺構検出（４月 21 日）

遺構測量（５月 12 日）

図 8 - 24

図 8 - 28

図 8 - 29

図 8 - 23

図 8 - 35

報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん　むかいだいせき 2
書名	浅川扇状地遺跡群　迎田遺跡（2）
副書名	(仮称)東邦ピュアタウン若槻東条分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第 164 集
編著者名	清水竜太
編集機関	長野市教育委員会　長野市埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212　長野県長野市小島田町 1414 番地　TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106
発行年月日	2022 年 3 月 31 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
浅川扇状地遺跡群（あさかわせんじょうちいせきぐん） 迎田遺跡（むかいだいせき）	長野県長野市（ながのけんながのし） 大字若槻東条（おおあざわかつきひがしじょう） 字迎田（あざむかいだ）550-1 外	20201	A-094	36° 68′ 16″	138° 22′ 28″	20200406 ～ 20200515	757㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
迎田遺跡	集落跡	弥生時代中期	谷跡	弥生土器	
		古墳時代中期		土師器	
		奈良時代～平安時代		土師器・須恵器	
		時期不明	小穴 2 基		

要旨	迎田遺跡は、浅川支流の駒沢川が形成した小規模扇状地に立地する遺跡である。今回の調査では、奈良時代～平安時代に埋没した谷跡と時期不明の小穴 2 基を検出した。谷跡の覆土からは、奈良時代・平安時代の土器のほかにも弥生時代中期・古墳時代中期の土器が出土しており、谷跡を挟む微高地上に該期の居住域が展開するとの見通しを得ることができた。

長野市の埋蔵文化財第164集

浅川扇状地遺跡群
迎田遺跡（２）

令和４年3月31日　発行

発　行　　長　野　市　教　育　委　員　会
編　集　　長野市埋蔵文化財センター
印　刷　　社会福祉法人ながのコロニー
長野福祉工場